

北海道日食かけあし遠征

斎藤 澄三郎*

7月21日の日食には花山天文台からは美幌へでかけた。場所は自衛隊美幌駐屯部隊本部屋上。メンバーは椿都生夫君と私の2人である。その他のグループは防衛大学の松丸教授の観測班と部隊関係の人々合計10人ぐらい、多分当時の一番ひっそりした観測地であったと思う。残念ながら地の利と天の時を得ず、大地をはう高さ数百米の濃いガスにかこまれて何もみえず、手をこまねいてただうすぐらい“30秒”を体験しただけにおわった。以下はこの遠征にからんだ、前後の話である。

天体暦でいう1963年7月20~21日の皆既日食には花山天文台ではじめから、彩層スペクトルを目標にしていて、そのため条件のよさそうなアラスカへ出かける計画を立てていた。予算のきまる年末から3月にかけてあちらこちらから、アラスカへ遠征できるとか、いやできないとかの真偽まちまちの噂が風によって型がかわって京都へ流れて来ると、何が何だかわからなくなる。当時、その遠征を担当することになっていた服部さんが、それらのニュースの源をさかのぼってたずねまわった末結局は遠征の予算が出ないということがはっきりわかるという一幕があった。したがってアラスカへはゆかないことになったのである。

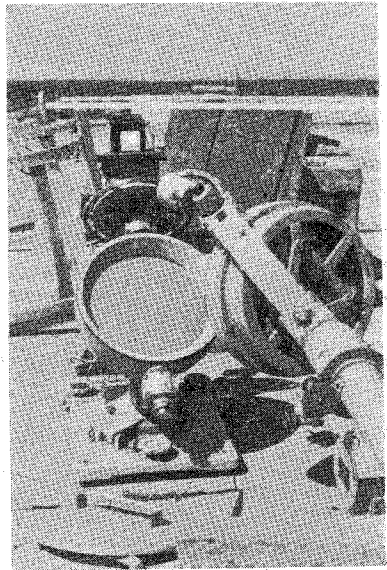
ところで、日食をあきらめて夏の観測をはじめようとしていた7月初旬になって、防衛大学の松丸さんからの勧誘があり、それに便乗してコロナの大型直接写真を撮る計画をまとめた。遠征する器械は太陽館塔上の30cmシーロスタットに口径18cm、 $f=3m$ のザートリウス用対物のツェイスレンズ。晴れさえすればイメージのいい写真がとれるだろうことは過去何回かの遠征のしめすところである。計画から梱包、発送まで1日半という快速ぶりであったけれど、あとに残るのはいつもの様に十重はたえの書類の難関。抜け道、まわり道を何とか通り抜けて暑い祇園ばやしの京都から、アカシアに雨のふる15°Cの札幌へついたのは17日早朝。美幌の夜はさらに涼しくて軽装のわれわれをおどろかせた。

ひろがる原野のはるかに阿寒と藻琴山がみえる部隊本部の屋上での設営は、基地の人々の援助ではかどり、写真のような急造小屋ができあがる。気になることは日出直後の欠けた太陽をどうしてシーロスタットでつかまえる

かである。仕方がないので、さいわいに晴れた前日の日出にあわせて、そのままそっと固定しておくことにした。

さて本番の日食ははじめにかいたように全くのお手あげにおわり、日食快晴率10割をほこる2人も一気に勝率が低下してしまい「×ノヨウニノボルアサヒノ……」という花山からの激電をうらめしく思う。実に両人声援の×球団はその数日恒例の連敗のさなかにあったのである。天気のこととは仕方がないとはいえ、皮肉にも夜があけるとガスはうすれて、日は昇りさわやかな朝となる。3時間足らずの大活躍の末、260kg、5個の梱包をすませて発送準備をおえる早業をみせる。折角の北海道をすこしばかり息抜き旅行を好天気の日にしたかったのがそのがんばりの理由。満員の長距離観光バスにゆられて阿寒をへて釧路へ。

とにかく日食はみえず、熊にも美女にもあわず、ただ牛乳とビールがおいしかったということを一週間足らずのかけ足遠征の結論にして椿君と札幌でわかれた。大沢さんととりかえこした24日からの74インチの観測にまにあう様、私は更にかけ足でかえらねばならなかったのである。



* 京大花山天文台